# 土 井 遺 跡

-土地分譲造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-

2009

安中市埋蔵文化財発掘調査団

安中市のほぼ中央に位置する安中地区は、近世安中藩の安中城を中心に旧中山道の宿場町が置かれ、また、街道筋には杉並木が整備された今もその面影を残した交通の要衝の街として栄えて参りました。 土井遺跡のある上野尻の地名は、古代碓氷郡の「野後郷」あるいは古代東山道駅路に設置された「野後駅家」に由来する地名として知られ、古代から関わりの強い地域であったことが分かっております。

このたび、株式会社エス・コーポレーションが計画した土地分譲造成工事を行うにあたって、土井遺跡での事前の発掘調査を行うことになりました。発掘調査では、古代の集落跡が発見され、本報告書はその成果をまとめたものです。本報告が、学術分野に寄与するだけではなく、地域を学ぶ郷土資料として活用されることを願ってやみません。

最後に、発掘調査にご協力いただいた株式会社エス・コーポレーションをはじめとする関係者の皆様、 発掘調査に従事していただいた方々には感謝申し上げる次第です。

平成21年3月1

安中市埋蔵文化財発掘調査団 団 長 中澤 四郎

# 例 言

- 1 本書は株式会社エス・コーポレーションが計画した土地分譲造成事業に伴う土井遺跡(略称D-26)の発掘調査報告書である。
- 2 土井遺跡は安中市安中一丁目字土井地内に所在する。
- 3 確認調査については国庫補助金・県費補助金により、平成20年度に安中市教育委員会(学習の森文化財係)が実施し、本調査及び遺物整理は原因者負担により、安中市教育委員会が組織する安中市 埋蔵文化財発掘調査団(団長 中澤四郎)が委託を受けて実施した。

事務局 本多英夫(副団長)、小島成公(事務局長) 藤巻正勝(事務局次長)、蜂須賀まゆみ(経理担当)

調查担当 井上慎也、深町 真、壁 伸明(調查員)

- 4 確認調査は、平成21年1月22日、発掘調査は同年1月23日及び26日にそれぞれ実施した。資料整理は、発掘調査終了後、平成21年3月31日までの間、断続的に実施した。
- 5 本書の編集・執筆は、井上が行った。資料整理は、井上、田川真知、金子綾子が行った。また、出 土遺物については、石丸敦史氏の協力を得た。
- 6 遺構の写真撮影は深町、遺物の写真撮影は井上が行った。
- 7 発掘調査の記録、出土遺物は安中市教育委員会が保管している。

# 凡例

- 1 遺構の実測図は1/80を基本とした。
- 2 遺構図中の北マークは磁北である。

本文中で使用した地図は、国土地理院発行の地形図「富岡」(1/25,000)、安中市都市計画地図 (1/2,500)である。

3 遺物実測図の縮尺は次のとおりである。

土器: 1/4 (●は須恵器を示す)

4 土層説明中での記号、略称は次のとおりである。

土層名称及び量の基準:「新版標土色帖」による。

色調<:より明るい方向を示す(暗<明)

しまり、粘性 ◎:あり ○:ややあり △:あまりない ×:なし

混入物の量 ◎:大量(30~50%) ○:多量(15~25%) △:少量(5~10%)

※:若干(1~3%)

混入物 RP:ローム粒子(溶け込んだ状態) RB:ロームブロック(固まりの状態)

YP:板鼻黄色軽石

5 本文・図面で示す火山灰の名称は、以下の記号を用いた。

浅間 A 軽石 = A s - A 浅間 B 軽石 = A s - B 浅間板鼻黄色軽石層 = A s - Y P

# 目 次

序

例言

凡例・目次

_		destroy and the	
1		調査に至る経過	
ΙΙ		調査の方法と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
		遺跡の地理的・歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
	1	地理的環境 ·····	
		歷史的環境 ·····	
	3	層序	
		遺構と遺物	
		縄文時代の遺構と遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
	2	古代の遺構と遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	2
V		成果と問題点	8

## Ⅰ 調査に至る経過

平成20年11月17日、株式会社エス・コーポレーション(以下開発者側)から、地域開発事業計画書が安中市地域開発対策委員会へ提出され、土地分譲造成予定地の埋蔵文化財の状況についての照会があった。該当場所は、周知の埋蔵文化財包蔵地内(市№337)にあり、平成20年11月に調査された並木遺跡の隣接地であることから、開発については、市教育委員会と協議が必要であることを同年12月16日付で意見書を通じて回答した。その後、開発者側と市教育委員会との間で協議を行い、開発者側の各種手続きが完了する翌年の1月下旬に、遺跡が存在した場合に影響を被る可能性が高い道路部分について埋蔵文化財の状況を把握するための確認調査を実施することになった。平成21年1月8日に、開発者側から確認調査の依頼、発掘届(法93条)が提出され、1月22日に市教育委員会で確認調査を実施した。調査の結果、道路部分の一部で住居址が発見されたため、開発者側とその取り扱いについて協議をした結果、事業の緊急性により現状保存は難しいとの理由から、工事に先立ち、発見された遺構を対象に発掘調査による記録保存の措置を講じることになった。1月22日付で、株式会社エス・コーポレーションと市教育委員会が組織する安中市埋蔵文化財発掘調査団(団長安中市教育長)の間で、埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し、1月23日と26日の予定で調査を開始した。

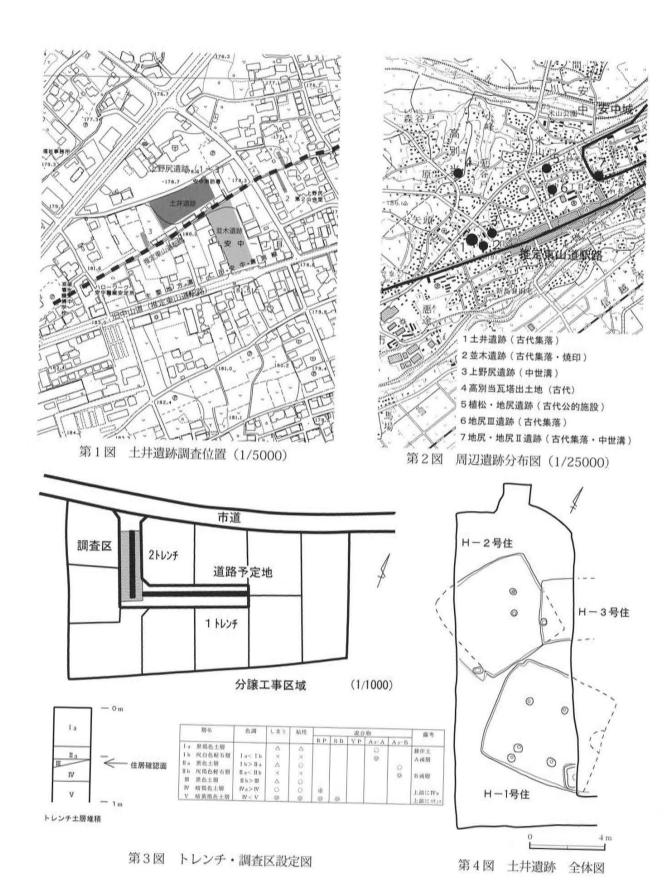
# Ⅱ 調査の方法と経過

発掘調査は、確認調査の結果により、調査範囲を決定し、バックホーにより表土を掘削し、ジョレンを使用して人力で遺構確認を行い、遺構の精査を行った。住居址の調査は、分層16分割法で行った。精査した遺構については、写真撮影、測量(土層及び平面)を行った。

確認調査は、平成21年1月22日に実施した。道路部分を対象に幅1mのトレンチを道路中央に設定し、バックホーにより遺構確認面まで掘削し、人力で遺構確認を行った。確認調査では、耕作による撹乱が著しく、遺構確認面の一部も掘削されていたが、計画された道路(「L」字状)のトレンチ2において、住居址と思われる範囲を確認した。他の部分については、遺構の存在は確認されず、また、工事による遺跡への影響も低いことから、確認調査で発見された遺構部分を対象に本調査を実施することになった。

本調査は、同年1月23日と26日に実施し、住居址3軒(古墳1軒、古代2軒)を調査した。調査区は工事設計図をもとに設定し、位置を記録した。遺構測量は、平板測量により1/40で作成し、遺構の高さを記録した。土層断面図は、メッシュ線を基準とする測量により1/20で作成した。出土した遺物は、層位及び区毎に取り上げて記録した。

資料整理及び報告書作成は、発掘調査終了後、平成21年3月31日までの間、断続的に実施した。資料整理は、遺物の洗浄・注記・接合・分類及び遺物台帳作成等の遺物整理、図面の修正・整理、各種台帳の整理、写真整理を中心に行った。報告書作成及び編集は、パソコン等のデジタル機器を使用して、図面トレース、データ集計、遺物実測・トレース、デジタルカメラによる遺物写真撮影、写真図版作成等を行った。



-2-

# Ⅲ 遺跡の地理的・歴史的環境

## 1 地理的環境

安中市は関東平野の周縁部である群馬県西部(西毛地域)に位置する。市の西部から北部にかけては 山地が広がる。碓氷峠付近を水源とする碓氷川が西から東へ流れ、市域を南北に分断する。また、碓氷 川の北側には並行して九十九川が流れ、安中市東部で碓氷川に合流する。これらの河川流域には、河岸 段丘が発達し、下位段丘(磯部、人見地区)、中位段丘(安中・原市地区)、上位段丘(横野地区)に区 分される。

土井遺跡は安中市安中一丁目字土井に所在する。本遺跡が存在する安中地区は、碓氷川と九十九川に挟まれた中位段丘面に存在する。本遺跡は、国道18号の南側に位置し、北へやや傾斜した平坦地に立地する。本遺跡の標高は、約180mである。

## 2 歴史的環境

土井遺跡は、縄文、古墳、奈良、平安時代の埋蔵文化財包蔵地(市№337)として登録されている。本遺跡の存在する安中地区は、古代碓氷郡の「野後郷」に該当し、現在は上野尻と下野尻に分かれて現在に至っている。また、野後郷には、東山道駅路の駅家が置かれた場所であるとともに、碓氷郡の郡家が存在した可能性も考えられる地域で、古代碓氷郡を考える上で重要な地域の一つに位置づけられている。関連する遺跡では、公的施設の可能性が高い遺構群が発見された植松・地尻遺跡、同時期の集落である地尻 II・III 遺跡がある。

土井遺跡の周辺には、市史編纂事業による東山道駅路関係の学術調査を実施した上野尻遺跡(平成10年度)、鉄製の焼印が出土した古代の集落である並木遺跡(平成20年度)が存在する。また、並木遺跡と土井遺跡の間を通る道路部分が東山道駅路の痕跡をとどめた地条帯として推定されてきた(木下1996)。上野尻遺跡の調査では、この部分についてトレンチ調査を実施した。調査の結果、トレンチからは、須恵器、瓦等の古代の遺物は検出できたものの、道路状遺構は確認できず、駅路の存在を明らかにするまでに至らなかった。駅路とされてきた地割りの下には、安中城へ延びると推定される中世の大溝が確認された(坂爪2001)。

#### 3 層序

土井遺跡の土層堆積は、概ね安中市の基本層位に準じている。調査では、浅間 A 軽石(As - A)を大量に含む I a 層(黒褐色)の下に浅間 B 軽石(As - B)を含む II a 層(黒色)及び純層である II b 層(灰褐色)、弥生時代から古代にかけての遺物包含層である III 層(黒色)、縄文時代の遺物包含層である IV 層(暗褐色)、硬質のローム層である V 層(暗黄褐色)まで確認した。黒色土の堆積が厚く、遺構確認面までは約80cmであった。ただし、耕作による撹乱と浅間 A 軽石を埋めた溝が遺構の確認面(IV 層中)まで及んでいる場所が多く、発見された遺構の遺存状態及びその周辺は良好ではなかった。

# IV 遺構と遺物

## 1 縄文時代の遺構と遺物

1トレンチ東の北壁において、土坑の底部付近1基が確認された。断面による確認のため、全体は不明である。土坑からは、縄文時代中期初頭の土器下半部が出土した。土器は小破片で脆く、接合は不可能とのことから、破片の一部を図示した。

遺物は五領ヶ台式の土器片(第7図1~4)と石器(黒曜石剥片1点、頁岩製スクレイパー1点、多 孔石1点)が少数出土した。1は口縁部、土坑出土の3(胴部)と4(底部)は同一個体である。

# 2 古代の遺構と遺物

#### (1)遺構

周辺地域における古代の遺跡の状況を考慮しての調査であったが、東山道駅路に関連する直接的な遺構は検出されず、今回の調査では、古墳時代後期の住居址1軒と平安時代の住居址2軒を発見した。

#### 住居址

#### H-1号住居址(第5図)

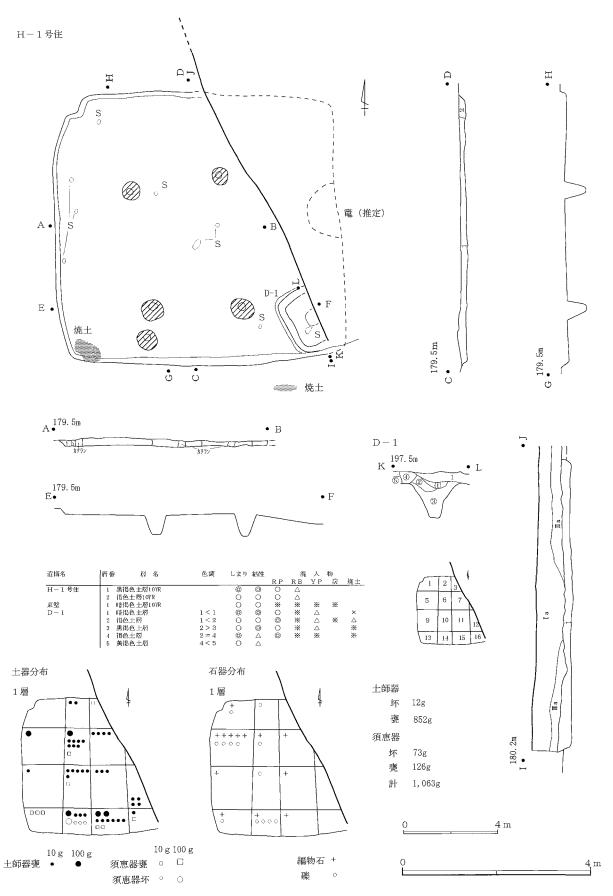
東半分を検出した。住居床面近くまで撹乱、削平されていたため、遺存状態は極めて悪い。覆土の状態から人為的な埋め戻しによって埋没したと推定される。住居構造は、平面正方形と推定される。柱穴は4カ所確認された。調査区際で貯蔵穴が確認された。竃は確認できなかったが、焼土の分布状況から調査区外(東竃)に存在する可能性が高いと判断される。出土遺物は、貯蔵穴周辺で土師器小型甕の破片がばらばらになって出土したのと編物石が床面で散乱して出土した以外は、土器片が覆土中から少数出土したのみであった。他時期(古代)の土器の混入も認められた。古墳時代後期から終末期段階。

#### H-2号住居址(第6図)

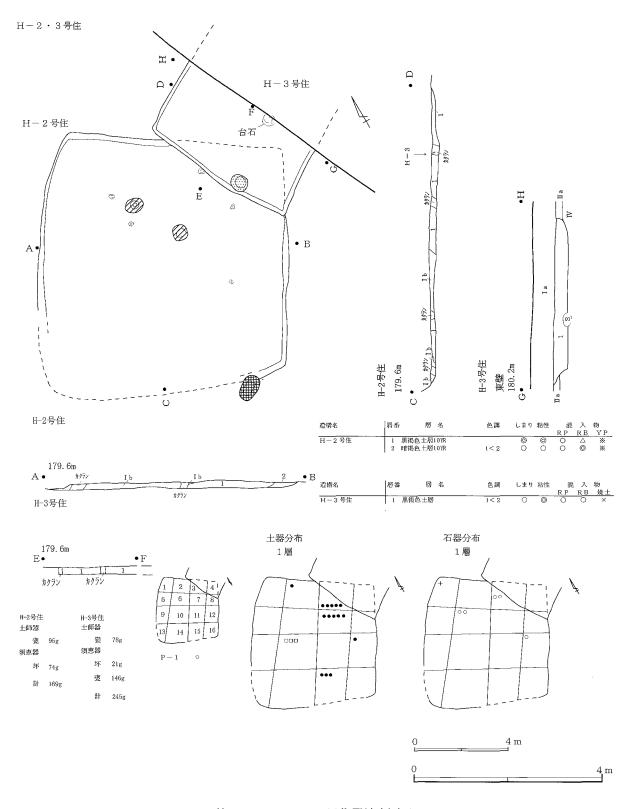
H-1号住居址と重複して検出された。切り合い関係と出土遺物により本住居址が新しい。確認段階で方形プランを確認したが、撹乱及び削平により極めて遺存状態は悪く、柱穴、土坑、竃は確認できなかった。出土遺物は須恵器の小破片が少数出土したのみであった。須恵器の年代により9世紀代と推定される。

#### H-3号住居址(第6図)

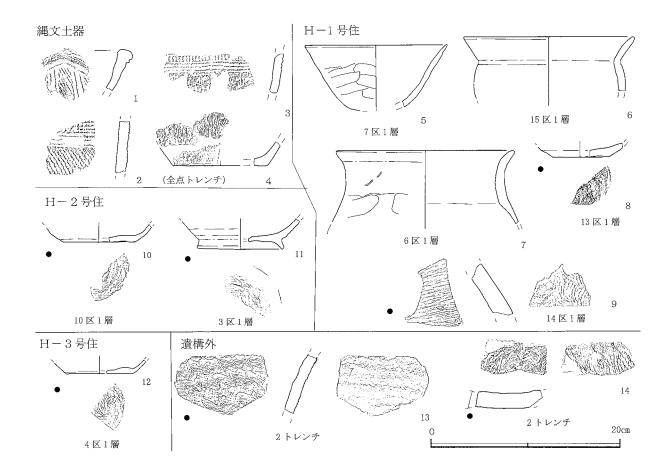
H-2号住居址と重複して検出された。切り合い関係により、本住居址が新しい。住居構造は、東西 方向に長い長方形と推定される。竃及び土坑は確認できなかった。出土遺物は、安山岩の大形礫が床面 で検出された以外は、覆土中から須恵器片が少数出土したのみであった。須恵器の年代により9世紀代 と推定される。



第5図 H-1号住居址実測図



第6図 H-2・3号住居址実測図



出土遺物観察表

出土遺物観祭表															
番号	遺構名	Z		種類	器種	法量 (cm)			成・整形技法の特徴						10土 計日
			眉	性類	名百代里	口径	底径	器高	①焼成	②色調	③胎土	残存	外面	内面	時期
5	H-1	7	1	土師器	鉢	(15)	_	(7)	酸化			口縁部~ 体部1/4		口縁部横撫で、体部撫で、 黒色処理。	古墳時代 後期
6	H-1	15	1	土師器	小型甕	(18)	_	(6)	酸化			口縁部~ 胴部1/8	□縁部横撫で、胴部剥落 (削り?)	口縁部横撫で、胴部撫で。	古墳時代 後期
7	H-1	6	1	土師器	甕	(19)		(8)	酸化	橙色	砂粒、白色粒、 黒色粒	口縁部〜 胴部1/8	b.	口縁部横撫で、胴部撫で。	古墳時代 後期
8	H-1	13	1	須恵器	坏	_	(6)		酸化	灰色	細砂粒、白色粒	底部1/4	轆轤整形、底部右回転糸 切り。	轆轤整形	混入 (平安)
9	H-1	14	1	須恵器	甕			_	還元	オリー ブ灰色	細砂粒、白色粒、 黒色粒	胴部破片	平行叩き目文	同心円叩き目文	古墳時代 後期
10	H-2	10	1	須恵器	坏	_	(7)		還元	灰白色	細砂粒、黒色粒 多量	底部1/4	轆轤整形、底部右回転糸 切り。	轆轤整形	9世紀
11	H-2	3	I	須恵器	高台付 碗	_	(9)		還元	灰色	細砂粒、黒色粒	底部1/4	轆轤整形、底部回転糸切り後、周辺篦削り後高台 貼付。	轆轤整形	9世紀
12	н-3	4	1	須恵器	坏	- :	(7)	_	還元	灰白色	細砂粒、黒色粒 多量	底部1/4	轆轤整形、底部回転糸切 り。	轆轤整形	9世紀
13	遺構外			須恵器	甕		_	_	還元	暗青灰 色	黒色粒、小礫	頸部破片	篦撫で後、櫛状工具によ る波状文。	撫で(粘土紐巻き上げ成 形)	古墳時代 後期
14	遺構外				平瓦	_	_	_	還元	褐灰色	細砂粒、黒色粒	破片	細布	縄目	平安時代

( ) は推定値

第7図 出土遺物実測図

#### (2) 遺物(第7図)

#### H-1号住居址出土の遺物

土師器の鉢(5)、小型甕(6)、甕(7)と須恵器の坏(8)、甕(9)の破片が少数出土した。他時期の土器の混在も認められたが、概ね古墳時代後期の土器群と思われる。土師器坏が破片も含め出土しなかったのが特徴的である。編み物石は、床面の広い範囲で12点(うち欠損2点、接合して1点を含む)出土した。大きさの平均(欠損除く)は、長さ14.3cm、幅6.8cm、厚さ4.8cm、重量630.9gである。全て安山岩である。

#### H-2・3号住居址出土の遺物

須恵器坏(10·12)、高台付碗(11)、土師器甕の破片が少数出土したのみである。撹乱が著しいため、他時期の土器の混在も多かったが、須恵器の特徴(底部回転糸切痕等)により平安時代(9世紀)の土器群と思われる。

#### 遺構外出土の土器

トレンチからは、須恵器甕の頸部(13)、布目瓦(平瓦)の破片 1 点(14)、中世内耳土器の小破片 1 点、 須恵器の小破片が少数出土した。

# V 成果と問題点

今回の発掘調査は、調査面積が狭く、遺跡の一部の調査であったため、遺跡の全容解明にまでは至らなかったが、古墳時代後期と平安時代の集落(9世紀)が存在することが明らかとなった。

調査によって得られたことは、「1. 土井遺跡周辺において平安時代を主体とする集落が広がっていること」、「2. 東山道駅路の通過地、駅家あるいは郡家が置かれた地域である「野後郷」の歴史的背景から、今回の調査地周辺部もこれらの関連する遺跡が今後発見される可能性が高まったこと」があげられる。

本遺跡の南側には、東山道駅路と推定される直線に延びる地条帯が隣接し、その南側には、古代の集落跡と鉄製の焼印が発見された並木遺跡、東側には大形掘立柱建物群といった公的施設等が発見された植松・地尻遺跡、北側には瓦塔の出土地も存在することから、土井遺跡を含めた周辺一帯には、一般的な集落とは異なる性格の遺跡が多数確認できる地域である。しかし、今回の調査においても東山道駅路の存在をは明らかにすることはできず、この点は今後の調査に委ねられる。

#### 参考文献

坂爪久純 2001 「東山道駅路推定遺跡(上野尻遺跡)」『安中市史』第4巻 資料編1 原始古代中世編 安中市

木下 良編 1996 『古代を考える 古代道路』吉川弘文館

# 写真図版

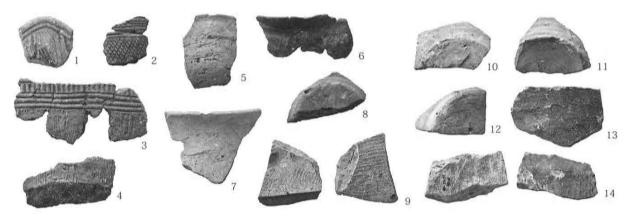




H-1号住居址 全景



H-2・3号住居址 全景



# 発掘調査報告書 抄録

5	りが	な	どいいせき
書		名	土井遺跡
副	書	名	土地分譲造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻		次	
シリ	ノーズ番	号	
編	著者	名	并上慎也
編	集機	関	安中市埋蔵文化財発掘調査団
編第	<b>『機関所</b> 右	E地	379-0292 群馬県安中市松井田町新堀245(安中市教育委員会内) TEL 027-382-1111
発	行	年	西曆2009年(平成21年)3月31日

· ""," · "," · "," · " · " · " · " · " · " · " · "	新在地	J -	- ド	北緯	東 経。,,,,	調査期間	調査面積	調査原因
771-12287 11		市町村	遺跡番号	0 / //				
土井遺跡	安中市安中字土井	102113	D-26	36°19′26″	138°53′01″	20090123 ~ 20090126	120m²	土地分譲造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
土井遺跡	集落	縄文中期 古墳~古代	土坑 1 住居 3	縄文土器・石器 土師器・須恵器・瓦・編物石・台石	古代東山道駅路の推定 地とされる周辺の古代集 落跡

# 土 井 遺 跡

一土地分譲造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ー

発 行 日 平成21年3月31日

編集·発行 安中市埋蔵文化財発掘調査団

群馬県安中市松井田町新堀245

(安中市教育委員会内)

印 刷 朝日印刷工業株式会社

群馬県前橋市元総社町67